

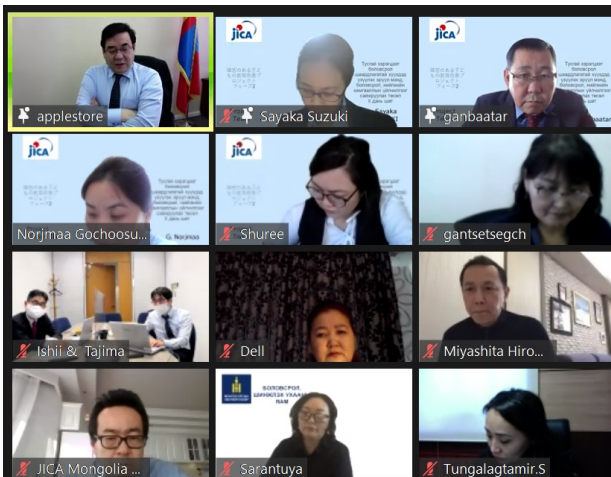
モンゴル 障害児のための教育改善プロジェクトフェーズ2 ニュースレター

Topics

- 障害児の教育改善プロジェクトフェーズ2の始動
- インクルーシブ教育に向けた取り組み①障害の認定・必要な支援へのつなぎ
- インクルーシブ教育に向けた取り組み②幼稚園での障害児の保護者とのかかわり方
- インクルーシブ教育に向けた取り組み③インクルーシブな学校を目指して
- インクルーシブ教育に向けた取り組み④学級環境を工夫しよう!
- コラム-インクルーシブ教育とは?-

2021年7月
第1号

障害児の教育改善プロジェクトフェーズ2の始動



合同調整委員会の様子

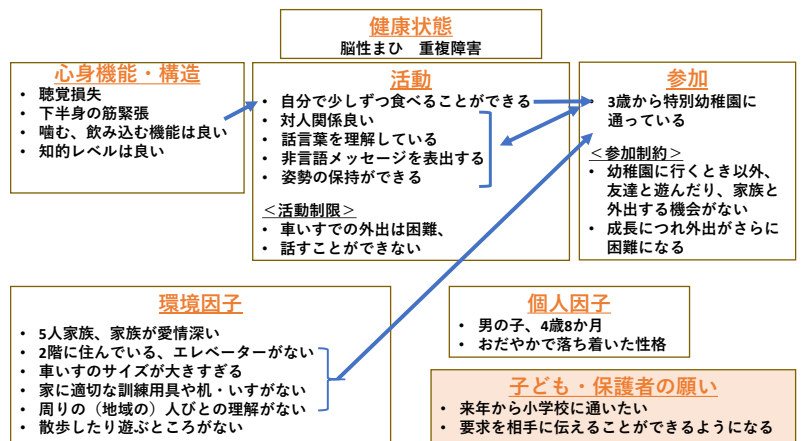
モンゴルの全ての子どもが地域の学校で学べるようになることを目指し、障害児の教育改善プロジェクトフェーズ2が始動しました。プロジェクトの英語名の頭文字をとって、START2という通称でモンゴルの方には親しまれております。2019年まで実施した「障害児のための教育改善プロジェクト」では、パイロット地域・パイロット校において障害や発達の遅れの早期発見のための活動や、学校で提供する教育サービスの向上を目指した活動を実施しました。フェーズ2となる本プロジェクトは、前フェーズで実施した活動の全国普及を目指します。さらに、幼稚園でも障害のある子どもたちが他の子どもたちと一緒に学べるようなモデルを構築し、全国に普及させる予定です。Facebookとプロジェクトウェブサイトではプロジェクト活動の紹介を、ニュースレターではインクルーシブ教育の役立つ情報や事例を中心に掲載予定です。

インクルーシブ教育に向けた取り組み①障害の認定・必要な支援へのつなぎ

各区県には、「障害児のための保健・教育・社会保障支部委員会」が設置され、月2回程度、16歳までの子どもの障害の認定、介護手当の決定、就園・就学状況の把握などを行う定例相談会が開催されています。

2018年11月15日付社会保障大臣・教育大臣・保健大臣合同令によって承認された「障害児のための包括的な発達支援ガイドライン」では、特に支援が困難な子どもについては、事例検討会を開催することになっています。

事例検討会では、はじめに、子どもの状況を「国際生活機能分類(ICF)」に照らして「個人因子」「環境因子」「心身機能・構造」「活動」「参加」に整理します。これにより、様々な専門分野や異なった立場の人がその子どもの抱える課題について共通理解を持ちやすくなります(右図)。その後、子どもの社会参加を改善するという観点から、例えば、小学校に入学することを目標として、発達支援計画を作成し、その実施状況をモニタリングします。



インクルーシブ教育に向けた取り組み②幼稚園での障害児の保護者とのかかわり方

START2で幼稚園の教員向けアンケート調査を行ったところ、「障害を受け入れられない保護者をどう支援したらいいかわからない・・・」「家庭からの協力が得られず困っています」など、保護者とのかかわりについての悩みが多くあげられました。園内でインクルーシブな保育を進める際、子どもの生活基盤となる家庭からの協力や連携が不可欠です。そこで、教員が保護者と関わるための3つのTIPSを紹介します。ぜひ、トライしてみてください！

1. 家族一人一人の思いを把握しましょう

モンゴルでは共働きの家庭が多く、祖父母が中心となって子育てをしている家庭も多くみられます。「ワンオペ育児」にならない良い面がある一方、両親は我が子を幼稚園に通わせたいのに、祖父・祖母は「可哀そう」「いじめられる」などと考え、園に通わせたくないなど、家族間で育児の考え方に違いが生じることもしばしば。また、自閉症など、見た目ではわかりづらい障害の疑いがある場合、「もしかしたら、我が子に障害があるかもしれない」という不安を父母のどちらか一方だけが抱えている場合もあります。子どもと一緒に暮らす家族それぞれの思い、抱えている不安についても把握するよう努めてみましょう。



障害に気づいていても、我が子の障害や発達の遅れを受け入れるのは保護者にとって大変なことです。保護者の気持ちを考慮した対応ができるといいですね。

2. 家族の希望をていねいに聞き取りましょう

幼稚園で障害児を受け入れ、その子の活動計画を立てる時、「家庭ではどうしていますか？」「園への要望は？」など、家族から「教えてもらう」姿勢が大切です。しかし、家族の希望が子どもの今の発達状況とかけ離れている、希望が多すぎる・・・などのケースもあるでしょう。そのような時は、その子の成長、素敵なところなど、プラス面を見つけ、送り迎えの時などに、教員から家族へ積極的に伝えてみましょう。そして、信頼関係が築けたら、一度、保護者との面談を設定してみましょう。子どもの今の発達状況と家族の希望までへの道のりについて、ていねいに対話し、発達状況にあった共通の目標を設定します。それにより、幼稚園での保育に対する保護者の協力が得やすくなります。もし、あれもこれもと数多くの希望がある場合は、「何を一番希望しているのか」に立ち返れるよう、保護者の思いも整理しながら、話を聞けるといいですね。

どんな保護者とも、日頃からのコミュニケーションが大切です。「今日は一人でコートを着れましたよ」など、小さな変化でもよいので伝えて子どもの成長や頑張り喜び合える関係を築いていきましょう。

3. 「ダメなものはダメ」と伝える大切さを理解してもらいましょう

家庭では、「障害があるから」という理由で、子どもが怒って物を投げる、叩くなどの行為を家族が黙認していることがあります。しかし、障害の有無ではなく、その子の成長・将来を見据え、家族が必要な関わり方をするように伝えていくことが重要です。「ダメなものはダメ」とはっきり伝えたり、「今度は物を投げず、こう言えるといいね」と、ふるまい方・子どもへの声かけ方法を具体的に伝えたりするなど、望ましい関わり方を、家族へ積極的に伝えていきましょう。また、言葉の理解が難しい子どもも、表情や言葉の強弱から、大人が話しているおおよその内容は理解しています。子どもの自尊感情を育むような子どもとの関わり方について、保護者との共通理解を図り、家庭での育児・園での保育に生かしていきましょう。

担任の先生の考えや思いが、保護者になかなか伝わらないこともあります。そのようなときは、園内で情報を共有し、園長先生やソーシャルワーカーが話をするなど、チームで保護者支援に取り組みましょう。

保護者の相談にのるための多目的スペースを設けている幼稚園もあります！（バヤンゴル区第161幼稚園提供）



インクルーシブ教育に向けた取り組み③インクルーシブな学校を目指して

皆さんは、校内委員会という言葉聞いたことがありますか？2019年5月に出された教育大臣令A/292において、障害のある子どもが学校で必要な支援を受けることができるよう、各学校で「校内委員会」を組織して支援することが規定されました。新しい取り組みのため、「校内委員会」のメンバーを決めたものの、何をしたいかわからないという教員たちも多いと思います。ここでは、「校内委員会」のキホンについてご紹介します！

目的

障害や学習の遅れ、行動面に課題のある児童生徒など、特別な教育的ニーズを有する子どもを学校全体で支援する。



個別教育計画作成はどうしよう？

指導法をどうやって勉強しよう？



担任が一人で悩まず、教職員が全員で助け合える学校にしていこう！

役割

- ◇ 特別な教育的ニーズを有する子どもを特定する
- ◇ その子どもたちの実態を把握する
- ◇ 一人ひとりに必要な合理的配慮について協議し、いつ、誰が担当し、どのように実施するかを決定する
- ◇ 上記の計画が実施されているかどうかをモニタリングする
- ◇ 必要に応じて、外部専門機関と連携する
- ◇ 教員研修や保護者・地域住民向け研修会を開催する
- ◇ 校内で事例検討会議を開催し、教員たちの共通理解を図る

年度のはじめに委員会の年間計画を作成し、計画に沿って活動するようにしましょう。

メンバー

- ◇ 校長
- ◇ 学習マネージャー
- ◇ ソーシャルワーカー
- ◇ 障害児を担当している教員
- ◇ 小学部指導法研究会のリーダー
- ◇ 中学部の教員
- ◇ 学校医
- ◇ バグ/ホローの担当者
- ◇ 管轄している教育課/教育局の担当者 など

スケジュール管理をしたり、とりまとめたりするための担当者を任命すると運営がスムーズ！



フブスグル県 Titem第2学校の取り組み



- ◇ ソーシャルワーカーが校内委員会の担当者となり、会議の呼びかけや開催場所の確保を行う。
- ◇ 会議の前に、支援が必要な子どもについて各担任から情報収集を行い、あらかじめリスト案を準備。担当者が委員会メンバーに担当する子どもを振り分け、子ども一人ひとりの状況について説明。最初の会議では教員全員が参加する形でもよいし、事前に情報収集する形でもよい。
- ◇ 学校での様子、家庭での様子、診断名（病院で診断されている場合）などを発表し、支援内容を決定。
- ◇ 個別教育計画を作成するかどうかについても話し合った（作成の際には保護者の同意も必要なので、学校だけで判断しないよう留意する）。

インクルーシブ教育に向けた取り組み④学級環境を工夫しよう!

9月からは新学期が始まります。コロナで子どもたちが学校に来られない状況が続きました。9月からは、元通り学校で子どもたちの元気な声が聞けることを皆さん願っていると思います。皆さんの学級に、授業に集中することが難しい子どもや大きな音に敏感な子どもがいませんか。学級の環境を少し変えるだけで、クラスの子もたちが学びやすくなります。新学期に向けて準備できそうな環境整備について紹介します。



教室の掲示物や飾りは、室内をにぎやかにしてくれますが、授業中は子どもたちの気が散る原因にもなります。目隠しのできる布を取り付けて、授業中は隠すようにできるといいですね。



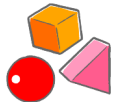
教室の入口の段差は子どもたちが意外とつまづきやすいです。このように板を斜めにおいて段差をなくすことで、つまづくことも少なくなり、車いすの出入りも容易になります。



席の配置も工夫してみましょう。視力の弱い子どもや集中力が途切れがちな子どもは前の中央の席にするとよいです。勉強が苦手で学習が遅れがちな子どもは、前から2列目にすると周りの行動を真似できます。



何がどこに入っているのか、一目で分かることも重要です。文房具の場所、カバンの場所などが分かるように絵カードや文字カードを貼るとよいですね。



いかがですか。少しの工夫でできることも多いのではないのでしょうか。皆さんの学校でも工夫した環境整備があれば、ぜひ写真とともにプロジェクトのFacebookに送ってください。事例として紹介させていただきます!

コラム-インクルーシブ教育とは?-

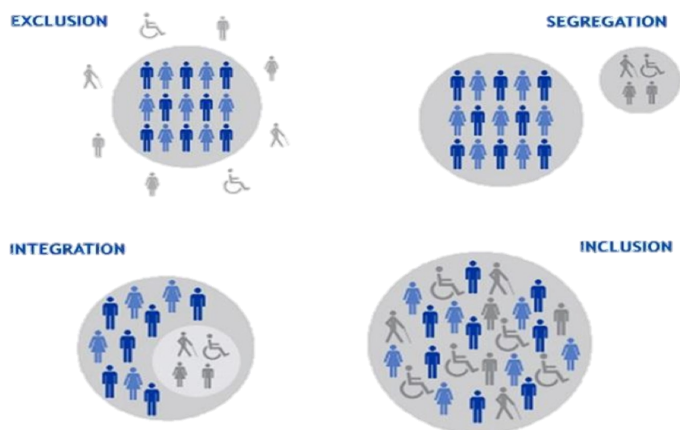
みなさんは、インクルーシブ教育と聞いてどんな状況を想像しますか?右の4つの図は、障害のある子どもに対する教育形態を示しています。

左上「Exclusion」:学校から、障害のある子どもたちが仲間はずれにされています。障害のある子どもたちが教育を受けることすらできない状態です。

右上「Segregation」:障害のある子どもたちを1か所に集め、他の子どもたちとは分けて教育を提供している状態です。

左下「Integration」:学校の中には入っているけれども、障害のある子どもたちを小グループに分けている状態です。

右下「Inclusion」:障害の有無に関係なく、同じ場所で必要な支援を受けながら学んでいる状態です。



Source: ACTIVITY, SPORT, PLAY FOR THE INCLUSION OF REFUGEES IN EUROPE
<https://www.aspiresport.eu/>

モンゴルが2009年に加入した「国連障害者の権利条約」では、「障害者が、差別なしに、かつ、他の者との平等を基礎として、一般的な高等教育、職業訓練、成人教育及び生涯学習を享受することができることを確保する。このため、締約国は、合理的配慮が障害者に提供されることを確保する。」と規定されています。プロジェクトでは、上の図の「Inclusion」を目指し、幼稚園や学校の関係者とともに活動に取り組んでいます。



モンゴル国 ウランバートル市 スフバートル区 第1ホロー Avzaga trade building 505号室



<https://www.facebook.com/JICA.START.2>



<https://www.jica.go.jp/project/mongolia/029/index.html>



jicastart2@gmail.com



+976-80486690
 +976-95937356

